

## 図書館の「公」と研究者の「私」の接続を

川上桃子

「台湾研究者としての立場から、図書館への要望を聞かせてください。」同僚ライブラリアンにそう問われるたび、私はいつも答えにまつまっていた。アジ研の図書館には、多数のユーザーの資料ニーズに幅広くこたえろという使命がある。一方、台湾経済を専門とする私が必要とするのは、特定の産業や企業を分析するための資料であり、その背後には、「これを知りたい」という私自身の欲求がある。図書館の蔵書構築という公共性を帯びた営みに、研究者としての「私」はいったいどう関わればいいのかろう？ そんな迷いを抱き続けてきた私にヒントを与えてくれたのが、UCバークレーとスタンフォード大学の東アジア図書館で出会った日本語書籍と、日本担当のライブラリアンたちだ。

UCバークレーの「C・V・スター東アジア図書館」では、中国語、韓国語、日本語の書籍を、言語によって分けてテーマごとに配架する「混配」方式がとられている。混配方式のよさは、あるトピックへの「自国研究」と「外国研究」の広がりが一目で把握できることだ。例えば日本企業論のコーナーをみると、日本人研究者による大量の成果とともに、少なからぬ量の韓国語の書籍が置かれており、韓国人研究者が、日本の高度経済成長や日本型経営の特質に強い関心を寄せてきた様子がみとられる。

他方、スタンフォード大学の東アジア図書館では、言語別の配架方式が採られている。薄暗い書庫のなか、大量の日本語書籍のあいだを歩いていくと、何十年にもわたって日本人が積み重ねてきた思考が、複雑に絡み合いつつ、ひとつの生命体を成しているさまに圧倒される。戦後の日本人が、第二次大戦の被害と加害の記憶に向き合ってきたこと。日本国憲法や、あるべき教育の姿をめぐる思案を重ねてきたこと。図書館とは、国民国家の自らへの問いかけの歴史、思索の軌跡が立ち現れる空間であると強く感じる。

いったいどういう人たちが、東アジアの社会科学の越境の姿や、国民の知の歴史をこうも鮮やかにみせてくれる図書館をつくってきたのだろうか？ そんな好奇心にかられて両館の日本語書籍担当ライブラリアンにお話をうかがった。

印象に残ったのは、いずれの図書館でも、学内研究者の研究・教育上のニーズにターゲットを当てて蔵書が構築されてきたことだ。ライブラリアンたちは、学内の日本研究者との対話、学生指導や資料に関する講義、研究セミナーへの出席を通じて、研究者・学生と非常に緊密なコミュニケーションを採り、そのニーズをきめ細かに把握している。

そうか、この傑出したコレクションは、不特定多数のユーザーのニーズの最大公約数を想像しながらつくられたものではなく、ライブラリアンたちが、個々の研究者の顔や、セミナーでの報告テーマをひとつひとつ思い浮かべ、研究の最先端を思い描きながら構築してきたものだったのか。魅力的な図書館づくりには、顔の見えるユーザーとの直接対話が不可欠なのだ。

このことを知ったとき、私ははじめて、同僚ライブラリアンからの問いかけの意味と、私が果たしうる役割を理解した。そして、二つの図書館が日本についてみせてくれたように、アジ研の図書館の棚にも、台湾社会の変容、人々の思考の軌跡と知的苦闘の姿をビビッドに映し出すような棚をつくりたい、という思いが沸き上がってきた。そのために必要な本のラインナップも頭に浮かんできた。

私は、ニッチで狭いテーマにみえても、それが対象社会の特質を解き明かす鍵となるようなトピックを掘り下げたいと願って研究をした。しかし狭いテーマを長く追いかけるうちに、そのトピックが本来持っていたはずの広がりを見失ってしまうことがある。研究者にとつて、研究対象テーマを通じて図書館の蔵書構築にコミットすることは、自分の研究対象が持つ広がりの可能性を再考するきっかけになるようにも思う。自らの研究の根っこを支える「私」の問題意識を、図書館の蔵書構築プロセスのもつ「公」と接続できたときに、「私の研究」は社会へと開かれるのかもしれない。

（かわかみ ももこ／アジア経済研究所 前・在バークレー海外調査員）